from nature

２０１９年　１１月　第９４号　福井県自然観察指導員の会

2019. 11. 6　刈込池

目　　次

●玄蕃尾や　兵どもは　にぎやかに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・和田　　肇　　1ｐ
●「夏休み標本教室　美しい植物標本を作ろう」実施報告・・・・・・町原　秀夫　　2ｐ
●私の七十二候～身近な自然観察④・・・・・・・・・・・・・・・・・・黒田　明穂　3～4ｐ
●深海からの使者が骨になるまで・・・・・・・・・・・・・・・・・・・久米田賢治　5～6ｐ
●東浦のみかん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・柴田　亮俊　　7ｐ
●8 月 10 日、白山砂防と岩屋俣でお出かけ研修・・・・・・・・・・・ 町原　秀夫　8～9ｐ
●お出かけ研修に参加して、一言感想・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　10ｐ
●保全活動報告（ファミリー広場ススキ除去＆神明山下草刈り）・・・ 組頭五十夫　　11ｐ
●お知らせ他・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　11ｐ

「玄蕃尾や　兵どもは　にぎやかに」

敦賀市　和田　肇

今回のウォークは二百名城に指定されて人気が沸騰している玄蕃尾城ということで、敦賀市博物館の元館長である川村氏を迎え自然観察と歴史探検のコラボという新しい試みになりました。川村氏によるとこの近辺の事件は２つあり、そのひとつは刀根坂の戦いです。浅井の応援に来た朝倉義景を信長がこの刀根坂でコテンパンにやっつけて再起不能にした戦いで、これによって朝倉の滅亡が決定的になったという有名な場所です。もっともこの時まだ城はありません。その２は賤ケ岳の戦いで柴田勝家の本陣があったところです。賤ケ岳で早々と破れてしまったため勝家はここでは戦わず北ノ庄に引き上げてしまいましたが、この敗戦が響いて勝家はお市の方とともに北ノ庄で亡くなっています。

川村氏は山道のところどころで「天正〇〇年勝家は・・・」というふうにまるで講釈師のごとくなめらかに戦いの模様を描写するだけでなく、当時の山城の作りを微に入り細を穿って説明し、その博覧強記ぶりはとどまることを知らない勢いで私たちを圧倒したのでした。

私は前から山城については疑問に思うことがあり、「せいぜい数百人がこもっているだけで何万という大軍に太刀打ちできるのだろうか？」という質問をぶつけてみたが、答えは「できます」ということでした（それ以上は軍事上の秘密で教えてもらえません）。ついでに埋蔵金も尋ねてみたが「ない」ということでした。残念です。

忘れてならないのはウォークの数日前の大雨で林道の一部に土砂崩れがあったのを市と交渉して速やかに通れるようにしていただいたことです。玄蕃尾城保存会の平川会長にはその他にもいろいろと大変お世話（川村氏のお弁当も含め）になりました。ありがとうございました。

肝心の植物のほうですが山道で観察できたのはムラサキシキブ、シロモジ、アワブキ、コアジサイ、エゾアジサイ、アブラチャン（葉柄が赤い）、ツヅラフジ、チャボガヤ、リョウブ、ヤブツバキ、シロダモ（葉をもむとよい香り）、クサギなどでした。このうち花が咲いていたのはリョウブとクサギです。また、実がなっていたのはアブラチャン、ムラサキシキブ、ツバキ、マタタビなどでした。マムシグサの実もよくめだちましたね。

シロモジは「福井の樹木」には「嶺南の県境」と出ており、たしかにたくさんありました。他の地区ではあまり見ない木ですが、５月の志津原渓谷ウォークで１本ありましたね。登山口にマタタビの木があり、下に実（食べられる）が落ちているという牧野氏の説明でしたが猫もいないので持って帰りませんでした。その他には倒木にめずらしい陸貝（キセルガイ）がいて藤野氏の説明を受けました。今井さん説明のハイイロチョッキリも珍しかったですね。

当日は植物や歴史に詳しいつわものたちがたくさん参加し、熱心に話を聞いたり質問したりで盛り上がりました。嶺南ケーブルネットワークのスタッフも来ており熱心に取材していました。後日放映されましたが敦賀在住の人しか見ていないと思います。残念でした。なお今回は歴史の比重が大きかったような気もします。個人的には大変面白かったのですが今後の検討も必要かなと思います。

「夏休み標本教室　美しい植物標本を作ろう」実施報告

坂井市　　町原　秀夫

今年は早朝から小雨模様の天気になり、当日に３家族がキャンセルした結果、親９名と子ども１３名の参加者となりました。例年、植物採集の説明と標本作製の手順をレクチャーホールにて行っていましたが、自然保護センター企画展示のため使用できなかったので、実習室にプロジェクターやスクリーンを持ち込むこととなりました。スタッフは５名体制で植物採集と標本作りを分担しました。

はじめに自然保護センターのあいさつの後、スライドとスタッフが作製した標本を見てもらいながら美しい標本の作り方について理解が深まるよう工夫しました。そして持ち物を確認していざ採集へ。なお、天候の関係でいくつかの植物をスタッフが分担して用意しました。

採集フィールドは下見時にセンターと妻平湿原のルートとし、花もしくは実のついている植物を３０数種採集できることを確認しています。特に今年はシケシダ、ジュウモンジシダ、ゼンマイ、ミゾシダ、サカゲイノデ、ヒメシダなどシダ類を多く採集しています。
なお、オオナルコユリ、シモツケソウ、ツノハシバミ、ケナシヤブデマリは四季の森観察ガイドで使うこともあって採集禁止としました。

天候は採集の終わる頃には雨が止み、蒸し暑さが一層増したせいでしょうか、実習室のエアコンを早めに入れておいたことでその後の作業がスムーズに進みました。

当日になってのキャンセルで参加者が減ったことは残念ですが、標本作りの場面では丁寧なアドバイス・指導ができたように思います。午後の標本づくりの時間を早めての説明ではスライドの内容を吟味し、フィールド名や標高を実際のラベルに反映できるようにしました。

植物の名前を調べるのはその後の親子の仕事になりますが、今回スタッフで話し合ったのは子どもらが自ら調べられるように「これは〇〇科の植物で調べてみてね」とアドバイスする工夫をしたことです。最近のことですが、ＡＰＧ植物分類体系で被子植物の科が大幅に改変されたため、調べ方についても注意するよう説明しています。スタッフの皆さんご苦労様でした。

私の七十二候 ― 身近な自然観察④ ―

鯖江市　黒田　明穂

日本にはかつて 72 の季節がありました。春夏秋冬の四季の他に，1 年を 24 等分した二十四節気（にじゅうしせっき），72 等分した七十二候（しちじゅうにこう）です。二十四節気には立春，夏至，秋分，大寒など，現在も普通に使われているものもあります。

七十二候は，半月ごとに推移する二十四節気をさらに 3 等分し，ほぼ 5 日ごとの動植物や自然現象の変化を示しています。「蛙始めて鳴く」「菖蒲（あやめ）華咲く」「玄鳥（つばめ）去る」「蟷螂（かまきり）生ず」「麦秋（むぎのとき）至る」など，日本古来の花鳥風月が具体的に表現されています。昔の人が細やかな季節の変化を感じ取っていたのは，日常生活や農作業が自然と密接な関係にあったからでしょう。二十四節気も七十二候も古代中国で作られたものです。七十二候は日本の気候風土に合うように何度も改定され，現在主に使われているのは明治時代に改訂されたものです。

七十二候に取り入れられた自然の移ろいは，地域によって，年によって異なっています。そこで，どこでどんな生物が見られたのか記録を基に，自分だけの七十二候を作ってみました。冬は外に出る機会が少なく，七十二候すべてはまだ揃っていませんが，季節の風物に気付くきっかけとして外に出かけるのも楽しいでしょうね。

参考・引用図書，ホームページ
「暮らし歳時記」www.i-nekko.jp
「日本の七十二候を楽しむ」白井明大・有賀一広　東邦出版

草木萌動（そうもくめばえいずる）2 月 28 日頃：草木が萌え出づる頃。冬の間に蓄えていた生命の息吹が外へ現れ始める季節です。

バイカオウレン（梅花黄蓮）：葉は 5 枚に分かれ，白い花びらのように見えるのは萼（がく）が変化したものです。薬草として有名なオウレンは黄色い根茎を煎じて整腸薬として用い，大変苦いことで知られています。2013.3.3 越前市定友町

竹笋生（たけのこしょうず）5 月 15 日頃：筍（たけのこ）が出てくる頃。筍は天を貫くように真っ直ぐに伸び，成長も早いことから縁起のいい食材として端午の節句には欠かせません。

シュレーゲルアオガエル：アマガエルに似ていますが，少し体が大きく，目の後ろに黒い線がありません。目の虹彩は金色をしています。繁殖期には「コロロ，コロロ」と高い声で鳴きます。2016.5.18 越前市文室

腐草為螢（くされたるくさほたるとなる）6月10日頃：草陰から蛍が舞い，清らかな光を放ち始める頃。蛍は別名「朽草（くちくさ）」といい，昔の人は腐った草が蛍に生まれ変わると信じていました。

ヒバリの雛：春はヒバリの繁殖期です。オスはメスを呼ぶために空高く舞い上がり，ホバリング（停空飛翔）しながら「ピーチュルピーチュル」「フィチフィチフィチ」などと複雑にさえずり続けます。2016.6.12 鯖江市小黒町

涼風至（すずかぜいたる）8月7日頃：涼しい風が吹き始める頃。まだ残暑は厳しいものの，朝夕にふと秋の気配を感じることができます。

クサギカメムシの1齢幼虫：生まれたばかりは派手な色をしていますが，脱皮をして2齢になると赤色は消えてしまします。冬になると越冬のために家の中に入ってきます。2015.8.9 越前町プラントピア

蟄虫坏戸（むしかくれてとをふさぐ）9月28日頃：虫たちが土にもぐり，冬ごもりの支度を始める頃。これから半年間，秋冬が終わるのを土の中で静かに待ちます。

サワギキョウの蜜を吸うホシホウジャク：後翅の黄色が目立つスズメガの仲間です。昼間に飛び回り，ホバリングしながら長い口を伸ばして吸蜜します。素早く羽ばたくのでハチのように見えます。2011.10.1 越前町プラントピア

虹蔵不見（にじかくれてみえず）11月22日頃：寒さで空気が乾燥し，虹を見かけなくなる頃。北陸では冬季雷が増えます。

ワタムシ：冬の訪れを告げる虫です。体に白色の蝋物質をまとっているため，綿のような姿をしています。普段は翅がなくメスだけで増えます。秋になると，翅を持ったオスとメスの成虫が生まれ，交尾をして産卵します。2015.11.22 越前市花筐公園

深海からの使者が骨にまるまで

福井市　久米田賢治

今年5月1日から5月26日まで、ハピリンホールと福井市自然史博物館において、巨大なリュウグウノツカイの標本展示が行われました。昨年、当会員で福井市自然史博物館「骨部」部員でもある浅利会員が本誌88号で、その貴重な魚を福井に運ぶまでの顛末を報告していますが、今回は、5m13cmという日本で2番目に大きいとされるその標本が完成するまでと、標本化作業の過程で感じたことを、時系列に沿って紹介しようと思います。

「解体」

2018年1月14日、「丹後魚っ知館」という水族館に到着した私たちはまず巨大なリュウグウノツカイに対面。そしてその大きさに驚愕し、次にこの大きな魚をどう扱うかの作戦会議を始めました。そして閉館と同時に、骨部部員は速やかに作業を始めました。１月の日暮れは早く、ライトで照らしながらの作業となりました。

まずは、内蔵がどのあたりまであるかの確認です。普通の魚を捌くように出刃包丁をふるうお魚大好き部員。腹を開くと最初に現れたのは、オレンジ色をした大きな肝臓。続いて胃や腸と思われる大きくそして細長い内臓。

内臓の位置を確認して、傷つけないように「頭部」、「腹部（肛門まで）」、「尾部（肛門より後ろ側）」の三つに切り離すことにし、まずは頭を切り離しました。そして、肛門のあたりで体を二分割にします。体は意外に柔らかく、一番重い腹部を、大きなコンテナにくるんと曲げてなんとか入れることができました。大きすぎて解体前に重さを測ることができなかったので、丹後魚っ知館の体重計を借りてコンテナに入れた状態で計測しました。合計で約68.1㎏ほどでした。そして分割したリュウグウノツカイの入ったコンテナを2台の車に積み込み、丹後から福井へと戻ったのでした。

「解剖」

1月20日、福井市自然史博物館で解剖作業は始まりました。担当学芸員、骨部部員のほか、滋賀県立大学から寄生虫の研究者浦部教授と研究室の学生さんたちも参加されました。他にも多くの見学者の参加がありました。

《内臓》

エラは赤でしたが、他の魚のそれに比べ少し色が薄いように感じました。体の外の部分からは血管や血液らしきものは全く見当たりませんでした。目と心臓が、ほぼ同じくらいの大きさであることにも驚きました。胃は単純なひとつの袋状ではなく、大きな胃袋の中に人間の腸のように蛇行した細い管がびっしり詰まっていました。内容物は形を留めたものはなく、ドロドロの粘度の高い液状のものでした。胃から肛門へと続く腸らしきものは細く長く、中には何も入っていませんでした。そして胃から尻尾の先まで伸びる細長い盲嚢のようなものもありました。

《筋肉》

肉質はとても柔らかく、ズブズブと指が入っていくような、とても水っぽい、密度の低いものでした。魚特有の生臭い匂いもほとんどありませんでした。写真

断面のように身をブロック分けしていた筋膜のようなものがあり、それらが肉と骨をつなげているようでした。

《表面》

体表面には鱗は無く銀色に鈍く光っており、解体中触ると銀色の成分（グアニン）と思われる物質が手につきました。またその銀色の体表面に黒い斑点が見られました。

《寄生虫》

体表面や内臓には１匹の寄生虫も発見されませんでした。

「標本化」

解剖もそうですが、標本作製も試行錯誤の連続でした。

《頭骨》

まずは、大きな頭です。引っ張り広げるととても大きく長く前に伸びる口。その周りや頭骨にはぷるんとしたゼリー状の物質がたくさん付いています。どこまで取り除けば良いのか。取り除きすぎたり、取る場所を間違えると骨がバラバラになってしまうのではないか、などわからないことばかり。ある程度除肉して、ホルマリンに漬けてタンパク質を固定し、ホルマリンを飛ばし、また除肉してなど、いろいろ試行錯誤しなんとか形を保ったまま乾燥させることが出来ました。

《脊髄その他》

頭は大きくかっこよくて、とても見応えがあるのですが、それに比べて脆弱なのが、それ以外の骨の部分です。世界最大の硬骨魚といわれている魚ですが、「これが本当に硬骨魚なのか？」と皆が首をかしげるほど骨がスカスカです。大きな魚なのに、背骨を支える筋肉ばかり多くて、脊髄やそれを取り巻く骨は細く脆く、軟骨状態のものがほとんど。これもどこまで除肉したら良いのか見当もつきません。とりあえず頭骨に近い比較的太い部分を除肉してみました。しかしあまりにも細く結合力も弱いので、きれいに掃除したものをその順番通りガーゼに縫い付け、その順番が変わらないようにして乾燥させました。残りの部分は、のちの研究に活かせるように、ヒレや膜を切り離しただけで除肉は最小限にして乾燥させたもの、切り離さずなるべく現状に近い形で乾燥させたものを作りました。

《仕上げ作成》

どのように展示用に仕上げるかが次の課題でした。そして決まったのが、黒いウレタンマットに、テグスで固定するという方法でした。しかしこれも順調に進んだわけではありません。二人で協力しあって表と裏から針を刺したり引っ張ったり、時にはかなり離れた場所から針が出てきて、やり直しということが何度もありましたが、なんとか時間をかけて慎重に仕上げていきました。

このように、検体の回収から解体、解剖、除肉、標本化まで一年以上かかって標本は完成しました。現在は収蔵庫に保管されていますが、今後も機会を得てみなさんの前で展示されることも多い標本だと思います。その節はどうぞゆっくり標本や展示物をご覧ください。

そして皆さんの心の中にひとつでも引っかかってくれたら、今後の研究資料として少しでも役立ってくれたらと願うばかりです。

東浦のみかん

敦賀市　柴田　亮俊

敦賀市河曽にある利椋八幡神社の境内に見事な顕彰碑が建っている。

河曽出身の金井源兵衛は、天明 5 年（1783 年）の生まれで、勤労をいとわず、社会への奉仕精神が強く、東浦地区の気候や風土を調べ、農業や山林の改善、荒地の開拓を進めた先駆者である。

両国三十三か所の霊場で、和歌山にみかんの木があると聞いて、みかんの木を阿曽に持ち帰って村の人に広めようと考えた。

その当時は阿曽の山林にはアブラギリを主に作っていた。因みに福井県はアブラギリの生産は日本一だった。アブラギリが廃れたあと、三方町では梅の生産に切りかえた。

源兵衛は、みかんを植えるために自分の畑のアブラギリを全部切ってしまった。

みかんを植える場所の年間平均温度が 15℃であることがわかり、この土地にもみかんを作ることが出来ると確信した。

和歌山から沢山のみかんの苗をとりよせ植えていった。みかんの実がなるまでは、村人から「アブラギリを切ってぼけたんじゃないか」と言われたが、源兵衛はひるまなかった。

何年か後に、みかんが実ったので嬉しく、みかんを重箱に入れて親類や近所にわけてまわったという。最初の頃、ロシアにまで輸出したことがあるそうだ。汽車のなかった時代に、何度も和歌山に行き、学んだ源兵衛の根性には敬服する。現在の東浦みかんにもこのような苦労があったことを紹介したい。

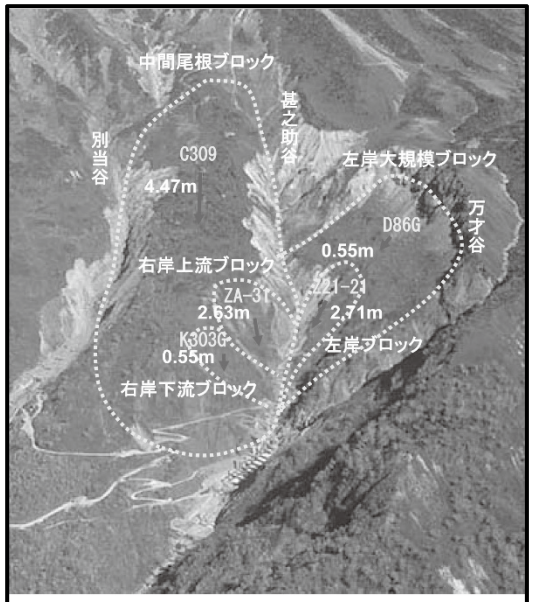
ひとことメモ

柴田さんの面白いお話は、このようにたくさん紹介されています。

機会があったら、是非一度読んでみてください。気づきや発見がありますよ。

８月１０日、白山砂防と岩屋俣でお出かけ研修

坂井市　　町原　秀夫



矢印は、S57.10～H23.10（29年間）の地すべりブロック移動方向と移動量
（移動量観測地点K303GとD86Gは平成16年以降）

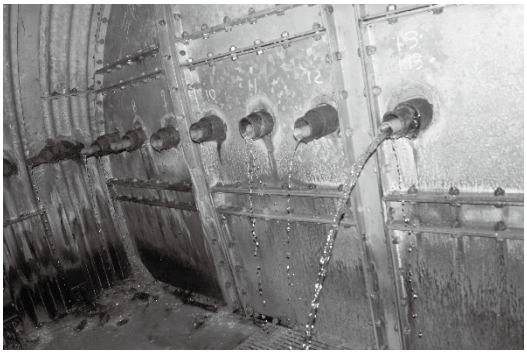
白山は日本三名山として古くから親しまれている霊峰です。一昨年、開山１３００年を迎え、福井県でも泰澄との関わりが深い山で、当指導員の会会員には白山登山を経験された方は多いと思います。しかしその一方で土石流災害を防止するための砂防工事が多くの裏方により、多大な経費をかけて行われていることはあまり知られていません。また、一昨年は火山性地震が一時的に続発し、これにより登山者には登山届が条例で義務づけられました。

今回のお出かけ研修は昨秋に計画したものの直前の台風で中止を余儀なくされたもので今回はそのリベンジです。

砂防工事と聞くと人工的な構造物を思い浮かべる方が多いと思います。ここ白山では大正元年(1912 年)、石川県により砂防事業が始められ、昭和 2 年からは国営の直轄工事として現在も進行中です。

登山道の一コースである砂防新道はかつての砂防工事の作業道です。このコースのある甚之助谷右岸ブロックは年間約 10～15 ㎝も下流に動いており、左岸の万才谷ブロックを含めた崩壊防止のための工事が高度な技術と資材を用いて進行しています。

今回の研修では工事解説をお願いした国交省・白峰砂防事務所の稲垣所長と市ノ瀬で合流し、立入禁止の工事用道路をマイクロバスで進み、土砂災害を未然に防ぐ人とのせめぎ合いの現場を見学しました。別当出合を起点とした工事用道路を走ってまもなく百万貫が流れ出たといわれる別当谷の展望地に着きました。登山道の別当覗きでは一望できませんが、別当谷を下から見た景色は圧巻でした。なお、稲垣所長の解説の後、付近の観察ではアサギマダラが羽根を休めていたのを発見、一時の写真撮影タイムとなりました。



中飯場を超え、さらにバスで上流へと進むと甚之助谷の砂防堰堤群が現れました。整然と上流にむかって並ぶ砂防堰堤は、かつての歩荷(ボッカ)さんの腕力で資材を運搬、造られたものもあるようです（配布資料より)。

現在、南竜ケ馬場の下流より流れ落ちる流水が地すべりの原因であるとして、万才谷の山ひとつ超えた赤谷へ向けた排水トンネルを作る工事が進行しています。

排水トンネルはこれまでに砂防新道のコース直下で数多く施工されているようです。この日は昭和 63 年に完成した延長 40ｍ の排水トンネルに入り、浸透水を集水ボーリングで排水している状況を見学しました。

見学場所としては他に、文化庁が指定した登録有形文化財となっている堰堤群があります。文化財

に指定されているとはいえ、地すべり抑制工事を行っても完全には止められず、これもその力により堰堤の変形が進んでおり、大地の変動に只ただ感心するばかりです。

白山砂防工事の詳しい説明や動画が国交省・金沢河川国道事務所のツイッターで見ることができます。
https://twitter.com/kanazawabousai1/media

また石川県白山自然保護センターの普及誌として「はくさん Vol.47,No1」がすでに発行されており、この記事の中に「甚之助谷地すべり万才谷排水トンネル工事」があり、工事概要がカラーで掲載されていますのでネットでは 11 月以降に閲覧できるのではと思っています。
(https://www.pref.ishikawa.lg.jp/hakusan/publish/index.html)

工事現場見学後、市ノ瀬に戻ってからは白山自然解説員を長年にわたって続けておられる福田太睦氏のお話を聞く時間を設定しました。福田氏はかつて市ノ瀬にあった山田温泉旅館を知る方で、室堂でのアルバイト経験など自然解説では聞くことができない経験談などをお話しいただきました。

市ノ瀬周辺の自然と白山の眺望を楽しむ岩屋俣散策では散策コースを辿りながら山深い山村の暮らしを彷彿とさせるクリやクルミの植生の状況、炭焼きの跡を観察しました。

夏の猛暑にもかかわらず、さすがに散策コースは涼しく、白山を眺望できる地点（写真）では休憩を取るとともに参加者それぞれの白山談義を聞くことができました。

なお、今回の参加者は 16 名で、事情により下記の写真には２名が写っていません。ご了承ください。

お出かけ研修に参加して、一言感想

井上美代子　白山の周辺の荒々しさ、驚きでした。危険な現場、広大さ。男性達（山男）の力強さに圧倒されました。まさに縁の下の力持ちです。険しく困難な所にもホッとする沢山のお花、お花畑の様ね。シモツケ、タカネナデシコなど。春はもっとすばらしいでしょうね。登山してみたいです。

北川　博正　町原さん、牧野さんの企画運営で有意義な一日となりました。稲垣所長さんからは 100 年以上に亘る白山砂防について、ソフトな語りで解説をいただきました。中飯場、甚之助等を目の当たりにし、中学生を引率しての白山登山を思い出しました。昭和 49 年夏が初回でした。

組頭五十夫　最も高所の地滑りと聞き驚きました。白山は、標高 2,000m位迄は堆積岩で構成され、それを突き破って噴出した火山噴出物で覆われています。浸食や地下水の影響で不安定になり滑ります。（特に融雪期には年に 10～15cm 移動）、2011 年東北地震以降、山頂直下で微小地震が活発化しています。白山は活火山なのです。現在、地下水を抜く工事と砂防ダム工事施工中。

櫻井知栄子　今までのお出かけ研修とは違った視点での研修でした。有難うございました。大正元年から始まった白山砂防の歴史と自然の脅威に挑み続ける不屈の工事に感嘆しました。稲垣さんの説明が分かりやすく、毎年 10～15cm 動き続けている白山に山は生きていると実感しました。

多田　雅充　白山砂防新道は何度も登りましたが、なぜそんな名前がついているかは知りませんでした。登っているときは意識しませんが、今回、登山道周辺で大規模な砂防工事が行われている現場を見て、名前のいわれを実感しました。人が何もしないと斜面が動き、崩れ、山の姿が変化してしまいます。砂防工事はまさに山と人間との長い戦いであることがわかりました。

中村　雅子　砂防工事の現場では、上流の森林域が流域の川や里そして海と密接につながっていることを実感することができた。また、歩荷が活躍していた白山登山の様子も教えていただき、往時に思いを馳せた。白山を自然面だけでなく社会面からも捉えることができた。

廣野　栄美　白山砂防見学で印象深かったのは、100 年間も継続している事業だけど、さらに今後もずっと続くということ。堰堤が土砂で一杯になったとしても、土砂災害の防止に役立つということ。働いている方々が、下流の人々のためになる仕事だからと、厳しい環境の中で頑張っていることを知りました。

吉田真美子　白山砂防ダムの工夫を凝らした堰堤や、今後もずっと続くという工事に大変驚きました。さらに驚いたのは、ビジターセンターで聞いた白山の歩荷（ボッカ）と呼ばれる人たちの話でした。昭和 38 年ごろまではボッカが約 80 キロもの荷物を背負って急な山道を 11 ㎞、標高差 1600mを 1 日で往復していたそうです。

和田　肇　今度の研修は勉強になることが多かった。砂防ダムは埋まっても役に立つ。登山道も年間何ｃｍかずり落ちている。工事期間はたった２か月半しかない。水が浸みとおらない工事もしている・・・などなど今まで登山道から眺めながらこんな大規模な工事をしていることを全く知らなかったのが今回わかってうれしかったです。白山登山の楽しみがひとつ増えました。

ファミリー広場ススキ除去＆神明山下草刈り報告

レポート：組頭　五十夫

■自然保護センターと協働保全活動　　参加者：15名
（会員：10名、センター職員：5名）
■11月4日　午前　9:00～11:30（F広場ススキ除去）
午後 12:30～14:30（神明山下草刈り）

竹原所長挨拶の後、紅葉の径をF広場に向かう。ウアーと驚きの声が聞こえる。あずま屋付近までススキが迫っていた。多田、北川、矢村、矢尾、山内さん達がススキをバリバリ刈り取って行く。それをみんなで運ぶ。刈り取っても再生してくるので根こそぎ除去するとの声で、写真（60cm×40cm）のように除去した。抜去した株を分割し、大宮さん運転の一輪車に乗せ、林内へ仮置きという流れで作業が進み、予想以上の約600㎡もの広場を確保できました。来年が楽しみです。お昼は、櫻井製の美味しい豚汁を何杯も堪能し、斎藤さん差し入れの、これまた美味しい稲荷寿司やスイーツを頂きました。午後は、神明山へ上り、カタクリ平、キンラン・ササユリ平の下草を刈り取りました。カタクリが咲きギフチョウが舞う春が楽しみです。■会員参加者：多田、北川、松村、矢尾、矢村、大西、鈴川、櫻井、斎藤、組頭　　（敬称略）

表彰おめでとうございます

このたび会員の笹木智恵子さんと牧野晃治さんが、長年にわたって自然公園の保護に尽力した功績が認められ表彰されました。

笹木智恵子さん　◆自然公園関係功労者環境大臣表彰◆

中池見湿地を中心に、永年にわたり保全活動・環境教育活動を行い、自然観察会等の活動に努力されたことに対し表彰されました。

牧野晃治さん　　◆自然公園指導員局長表彰◆

自然解説や自然保護の普及啓発活動に積極的に取り組み、また、山登りのサークル活動を主催して、登山マナーや自然の楽しさを指導していることに対し表彰されました。

◆９５号（2020年２月発行予定）の原稿を募集しています。

〆切は、２０２０年１月１０日

★１ページ43字×40～45行
ＭＳ明朝体　10.5～11ｐ　Ａ４版
内容は自由。写真も数枚程度ＯＫ。文章も含め１ページに収まるようにお願いします。
表紙の写真も募集しています！！

フロムネイチャー企画編集：山岸登美子
Ｅﾒｰﾙ：papanyan@cpost.plala.or.jp
〆切後でも次号でご紹介させていただきますので、皆様からの原稿をお待ちしています。

福井県自然観察指導員の会
会　長　多田　雅充
事務局　櫻井知栄子
〒918-8005 福井県福井市みのり３丁目23-13
電話　0776-33-3772
Email:sunafukin8080@orchid.plala.or.jp

「会費の納入は、下記口座まで」
郵便振替：００７１０－９－３６０６１
（加入者名：福井県自然観察指導員の会）